

鹿児島若年層話者方言のヨとガ*

——ネオ方言の記述法を考える——

太 田 一 郎

キーワード：ヨ，ガ，鹿児島方言，文末詞，ネオ方言，対話，方言記述法

はじめに

共通語化による方言変容の結果として、鹿児島方言では在来方言語形から共通語語形への大規模な置き換えが生じた (cf. 太田1998)。たしかに、語彙や文法項目の置き換えからは表面上は共通語化が進行したように見えるが、中には用法が共通語文法と完全に一致しないものもある。特に文末詞などを含むモダリティ的意味を担う文末表現の用法には、共通語と同じ語形を使用しながらも、地域方言の新しい特色が見られる。そして、方言語彙の共通語への置き換えの中で、生き残った在来方言語形は、新しく登場した語形とともに、方言の体系を再構築している姿が伺える。しかし、共通語化による方言変容をとらえてきた地域語研究においては、地域方言の動態全般に関わる研究報告は多いが、方言の体系的記述はまだほとんど行われていないのが現状である。本稿は、鹿児島のネオ方言を記述する試みの一部として文末詞ガとヨの分析記述を行うが、その際、「対話」を文末詞記述のための基本単位とみなし、特にネオ方言の記述のための方策として、文末詞の意味レベルをプロトタイプの意味と機能的意味に区別して記述することを提案する。

1. コーパス

本稿で検討する鹿児島方言の用例は、「鹿児島ネオ方言コーパス」(以下 KN

コーパス) から引用する。このコーパスは1997年7月から8月にかけて収集した鹿児島市内の大学生33人分の自然談話と筆者との面接談話から成る。このうち今回は8組17人分の自然談話データを使用する。各組の話者の構成と使用した分量(時間)は表1の通りである。

談話番号	話者 A	話者 B	話者 C	談話時間
M 1	女性	女性*	なし	30分
M10	女性*	女性	なし	30分
M12	女性*	男性*	なし	30分
M13	女性	男性*	なし	30分
M17	女性	男性*	なし	30分
M18	女性	女性	女性*	60分
M20	女性*	女性	なし	30分
M22	女性	男性*	なし	30分

表1 話者の構成
(*は鹿児島市出身)

2. 文末詞の意味・機能のとらえ方 —対話調整と談話管理—

2.1 先行研究

まず、具体的な分析に入る前に、最近の研究で文末詞がどのように位置づけられているかを検討し、本稿における文末詞分析のため視点を確定しておく。

2.1.1 片桐(1997)

片桐は、対話を「動的変化」と「情報共有」という二つの特徴を持つものと考えている。すなわち、常に変化し、確実性が十分でない状況で、対話者たちは情報共有を何とか実現していくのが対話の姿であり、情報共有に貢献する発話の機能を「対話調整」と呼ぶ。対話調整に重要な機能を担うのは、特に対話に特徴的な言語様式(あいづち、言い直し、言い換えなど)だと考えられるが、情報の受け渡しの方策に関わる文末詞やイントネーションもこの中に含めることができる。つまり、これらの要素は命題的情報は伝えないが、話し手がその

情報をどのように受容しているかという補足の情報を発話に付加し、話し手と聞き手の間で行われる情報の共有を促す働きをされると考えられる。この説にしたがえば、文末詞の機能は情報共有のための対話調整と見なすことができると思われる。

2.1.2 金水・田窪 (1997)

金水・田窪の談話管理理論では、言語表現を表示する二つの心的領域（D-領域、I-領域）を仮定することが提案され、解釈機構に基づく文末詞の説明が行われている。D-領域は、対話の現場や長期記憶などからの直接経験情報が表示（格納）される知識データベース的領域、一方I-領域は、間接的に得られた情報や仮想的情報などの概念的知識が表示される領域である。彼らのモデルでは、コミュニケーションとは、「立証されていないI-領域の知識を、D-領域の知識に基づいて立証していく行動」（p.258）とみなされ、文末詞はこの立証の過程を対話者が相互に見せあう際の標識として位置づけられる。この観点から、文末詞ヨとネの対話における機能は、ネが「記憶領域内において命題を断定に導くために行う論理計算の過程にあることの表明」（P.264）、ヨが「情報をI-領域に記載し、関与する知識に付け加え、適切な推論を行えという標識」（田窪・金水1996：72）であると考えられている。

これら二つの理論的枠組みには、共同行為、解釈機構という視点の違いはあるが、基本的発想はよく似ており、排他的というよりもむしろ相補的と思われる。

2.2 本稿の立場

以上のようなモデルで文末詞の機能をとらえることには大きな利点が二つある。第一に、ひとつの語形がたくさんの意味を受け持つような辞書的記述を避けることができることである。文末詞の場合、その語彙的意味はほとんどなく、たとえば(1)のように、むしろ談話においてある種の機能を果たすと考える方が妥当である。

(1)a. 雨が降ってる

b. 雨が降ってるよ

(田窪・金水1996: 72)

田窪・金水は、(1) a は単なる事実認識にすぎないが、(1) b は状況に応じて様々な推論（傘を持って行きなさい、洗濯物を取り込んで、など）へとつながると述べている。つまり、文末詞を伴った発話の表面上の解釈（＝最終的に受け手が到達する意味、つまり警告、要請など）は、状況により導かれる語用論的推論によるものにとらえるべきであり、文末詞そのものに内在するものではないことは明らかである。たとえば、白川（1992）などにも文末詞ヨの機能についての解説が見られるが、どちらかと言えば、ヨの機能の記述だけにとどまっておき、言語記述のモデル内で十分な位置づけが行われているとは言い難い。それに比べて、上述の二つの先行研究は対話もしくは談話という視点からより明示的に文末詞の機能を提示してくれる。

また、文末詞類はいくつかの語形の間で部分的に意味の重複が見られるが、このような現象も文末詞各語形はそれぞれのプロトタイプの意味をもち、知識状態を表示する役割を担うと仮定すれば、最終的に聞き手が到達する意味カテゴリー（依頼、断定、要請など）は推論によって得られるものと考えられることができるようになる。結果的に得られた意味カテゴリーは同じものでも、推論の出発点のプロトタイプの意味が異なるかぎり、最終的な発話の意味にはいく分かの異なりが感じられるはずであり、上述の二つのモデルはこれらの差異を表す要因までも含めて説明できる。

二つ目の利点は、上述のモデルはどちらも話し手の知識状態を相手に知らせることと文末詞の機能を結びつけている点にある。すなわち、文末詞を使って自分の知識状態を知らせるということは、状況によっては相手に対してある種の行為（たとえば情報検証など）への協力の要請（cf. 田窪・金水1996: 72）を結果的に意味したり、様々な推論の導出へとつながる。文末詞が対話に特徴的な言語形式の一つだという事実は、お互いの知識状態を見せあいながら、未検証の知識を検証し、情報共有の状況を更新していく「対話」という共同作業

において、文末詞がその対話の特質と深く関わっていることを意味している。言い換えれば、「対話」を念頭においた言語モデルでなければ、文末詞の記述は十分に行えないということである。これまでの文法記述においては、「話し手」、「聞き手」といった談話構成上の概念が文末詞の記述にときおり引き合いに出されることはあったが、「対話」という人間行動の性質を「情報共有の実現」や「立証されていない知識の立証」という形で明示的に定義し、その中で文末詞の機能を記述した研究は上記の二つを除いてはないように思われる。

以上述べてきたように、これらの研究では、文末詞の分析を行うために非常に重要かつ有益な視点が取られている。本稿では、これらのモデルの利点に着目し、「知識状況の提示」と「情報共有のための対話調整」の二つを文末詞の基本的機能とみなし、鹿児島方言の文末詞の分析を行うことにする。また、文構造を以下のような形でとらえて話を進める。すなわち、

(2) (命題的) 情報 X (+ 文末詞)

という構造を仮定する。情報 X は文末詞の持つ意味を付与された形で談話に提示され、必要と思われる推論等を経て最終的な発話の意味へと到達すると考えられる。

以下、ガ、ヨの順で分析を進める。

3. ガの機能¹

3.1 先行研究

まず、先行研究におけるガの取り扱いから検討を始めることにしたい。木部(2000: 99-101)は以下の例を挙げて、同じく判断伝達系で「無色透明の伝達」を表す在来文末詞のドとの対比でガを考察しており、その意味を(7)のように

¹ 上村(1998: 141)にもガの意味についての記述があるが、「軽く言い張る、同意を求める、余情を込める」という表面的意味の記述がなされているのみである。

定義している。

- (3) アンシ トワ ヤマダサン ジャン ド
- (4) アンシ トワ ヤマダサン ジャン ガ
- (5) モ キチヨッド
- (6) モ キチヨツガ
- (7) ガは語として「そのこと (=前接する命題) を自明のこととして伝達する」という意味を持つ。言い換えればその話題について相手の意見を聞く必要がないという意味を持つ。

つまり、(3)はヤマダサンを知らない人に教えるとき、(4)はヤマダサンを知っている人が、名前を間違ってしまった場合やヤマダサンと気づかなかった場合などヤマダサンという人物を知っていることを前提としているといった区別があると木部は言う。また、同様に(6)は、ヤマダサンが「とっくに来ている、当然来ている、来ていることをあなたは知らなかったのかなど、やはり来ていることを前提とする」という意味で「自明の判断の伝達」と考えられている。(5)については「普通の伝達」と述べられているだけだが、(3)、(4)の説明から考えれば、「(誰かが) もう来ている」とそのことを知らない人に伝えるということになるのだろう。

木部の分析は方言文末詞の意味に談話機能的とらえ方を施そうとしている点が優れているが、本稿の枠組みに照らせば、記述に用いられる概念の定義にやや不明瞭な点があるように思われる。そこで、本稿の立場から木部の主張をとらえなおしてみたい。² まず問題となるのは、ドとガが分類される「伝達」という意味カテゴリーである。このカテゴリーは主観的判断系(ド, ガ), 推量系(カイ), 客観的判断系(オ, ヨ)などで構成されるようだが、そもそも対話そのものが基本的に相手の存在を前提とするかぎり、そこには必ず何らかの情報伝達が行われているわけで、意味記述にしる機能記述にしる改めて「伝達」

² ただし、木部の記述は老年層のガに関するものであり、若年層のガについてはふれていない。若年層の用法は老年層とそれと多少の異なりがある可能性も否定できない。

というカテゴリーを立てる必要はないと思われる。

一方、本稿の立場からは、「伝達」とは「談話領域への情報の提示，すなわち言語情報が処理される参加者たちの心的領域への情報の書き込み」ととらえることができる。書き込まれた情報は、後接する文末詞の意味を付加した形で受け手に届き、推論など適切な解釈作業を経て文脈に最も適切と思われる意味が得られることになる。つまり、「命題情報X+ガ」という発話からは、「Xが自明のことである」という話し手の知識状態を表示する書き込みが談話領域になされることになると言える。ガ以外の在来形文末詞については、KNコーパスに用例が現れないため推測するしかないが、それぞれの語形が持つ意味は異なっても同じ知的操作を受けるものと思われる。

しかしながら、若年層の用法を見ると、これでもまだガの意味は十分記述できたとは言えない。なぜなら、「自明のこと」の意味が十分に明らかになっていないからである。つまり、文末詞を話者の知識状態を表す（そして談話領域に書き込む）標識とみなすと、「そのことを自明のこととして伝達する（＝談話領域に書き込む）」というガの意味の定義は、ガの伝達の様式についての定義であり、ガのプロトタイプの意味ではないのではないかという疑問が生じる。言い換えれば、なぜ自明のことと感じられるのか、どうして話者は自明のこととしてとらえているのかについては明らかでないままである。文末詞ガの意味を十分に記述するためには、伝達という談話における行為とガそのものの意味を分けて考慮し、さらに「自明のこと」の意味を明示的に示す必要があると思われる。

3.2 「自明のこと」の意味

では、以下の例を検討して、「自明のこと」の意味を探ることを試みる。なお、用例は読みやすさを優先させるため基本的に音調記号をつけていない。ただし、昇降調の音調（cf. 木部・久見木1995）が文末詞類と共起するところだけは、たとえば(18)のように「『』」で囲んである。下がり目だけが聞き取れるところでは、(8)のように下がり目だけを記している。また、談話の内容を理

解するのに必要と思われる文脈も、() 内に示している。

(8) (前髪を切ってしまうことについて)

- C378 まえがみなくすのゆうきいるよねー
 B423 あー
 A343 いるよ ほら (笑)
 C379 あなたはにあってるからいいわけよ
 A344 にあってないがー』 こわいんだって

(M18)

(9) (旅行での行く先を探しながら)

- B232 (なが) ながと? わかんない わかんない なが なが
 C203 ながとー? ねー ながとっておもうよねー あたしもそうおもったけど
 B234 うん ぼくじょう えーいろいろあるんだー
 C204 まあなんとかなるがー なんか うわさに
 B235 あーあった これ たてしなしらかばユースホテルって

(M18)

(10) (旅先での計画を立てながら)

- B239 ひしょち めがみこーもいける なつはぼーとあそび へらぶなぶな
 づりだって
 C210 どうかおよげない『けー』 わたしおよぎたいがよー
 B240 およげるんじゃない?
 C211 ねー およぐがー
 A163 どこで みずうみで

(M18)

(11) (クラブの先輩たちのつき合い方について)

- A35 でもさー ××さんと ○○さん (から) かなりたたかされてるよ
 B35 だって (あれとる) あれは べつだよー だって あのひとたちの
 どこまでほんきか どこまでうそかわかんないがね

(M12)

以上のように、ガが用いられる形式は次の三通りである。

- (12) a. 命題に後接し、その他の文末詞等が後接しない
 ((8)A334, (9)C204, (10)C211)
- b. 命題に後接し、さらにヨが後接する ((10)C210)
- c. 命題に後接し、さらにネが後接する ((11)B35)

ガヨでは主語は一人称で、命題Xは話し手の判断・意見であることがほとんどである。ガネは同意や確認を求める際に用いられるが、文脈によっては（聞き手に対する）非難などを意味することもある。ガの後にヨとネが後接するガヨネという形は見当たらない。現れる頻度も後述する勧誘の意味をのぞけば、どちらかといえばヨまたはネの後接する形の方が多いようである。

さて、これらの例からガの意味を改めて検討してみることにする。(8)は話者Cの「(前髪をなくしても) あなたは似合っている」というコメントに対して、話者Aが「似合っていない」という自らの判断を伝えるのだが、「(自分は)前髪をなくしたら似合わない」ということをAは普段から気にしているのであれば、その判断がガの使用の前提条件になっていると言えないことはない。しかし(9)C204では、「何とかなる」という考えがガの前提条件として存在するとは言にくいように感じられる。むしろ、木部(2000: 101)自身が「自明のこと」の言い換えとして使っている「その話題について相手の意見を聞く必要がない」という意味に近い。また、(10)C211の「泳ぐガ (=泳ごう)」も、勧誘という派生的意味ではあるが、「自明のこと」であるから勧誘の意味に転じるというより、むしろ相手の意見を聞くまでもなく当該の事態が起きると話し手が主観的判断を伝えることで聞き手がその事態に参加することは暗黙のうちに当然のことという認識ができあがり、結果的に誘いかけの発話として機能することになると考えられる。³

そうすると、これらの例も含めてもっと包括的にガの機能を説明できるプロトタイプの意味を仮定する必要がある。そこで、(13)のような意味を若年層の

³ 木部(2000: 102)は、ガが「親しさ」を含意すると述べるが、これは英語の強制を表す法助動詞 *must* がしばしば丁寧な招待として機能することと同じで、ポライトネスの原理などから説明することができる。

ガのプロトタイプの意味として仮定する。

- (13) ガは命題的信息Xが成立すると発話時に話者が判断を下したという標識である

すなわち、本稿の枠組みでは、ガは「ある事柄について、何らかの情報源を参照にして当該命題の情報₁が真であるという判断を（発話時に）話者が下した」ということを談話領域に提示するのが基本的意味であると考えられる。何らかの情報源とは、たとえば日常的知識、過去の経験、現在の話者の感情などであり、それらの情報に当該命題を照らしてみ、その命題の情報₁が成立する（＝真である）と判断した旨を談話領域に書き込むことが、ガの本来的機能とみなすことができると思われる。また、(10)のガヨ、(11)のガネは、真と判断された命題を後接の文末詞の意味を付加した形で談話領域へ提示するものである。(10)のような勧誘のガは、たとえば、「行くガ」ならば『行く』という命題が成立すると判断した→行くことは決まったことなのだ→だから行こうと推論が進むものと考えられる。そして、この意味で頻繁に用いられるようになると、「誘い」は推論から導かれる会話の含意ではなくて、慣習的含意として認められるようになり、さらには固定した意味として独立するようになる。そして、(14)のように意志・希望を表す動詞の活用形と共起し、単に「誘い」という意味の文末詞として意味が固定される様になると考えられる。

- (14) (旅先で何をするかを決める話をしながら)

B303 やっぱるぶをかわなきゃ

A217 うん かおうが あとから

(M18)

この例はKNコーパスに1例だけ見つかったものだが、小学生くらいの子供たちの談話ではよく耳にする。筆者はこれまでに「行こうガ」、「しようガ」、「やろうガ」などの形を確認している。それ以外の動詞が同じ振るまいをするかど

うかは今のところわからないが、今後さらに意味の固定化が進む可能性はあると思われる。

以上、文末詞の機能を「対話」という観点から再定義して分析に反映させ、木部（2000）が述べるガの意味を再検討した。次節では同じ視点からヨを考察するが、併せてネオ方言を記述する際に生じる対話をベースにした記述法の問題点も考察する。

4. ヨの機能とネオ方言記述の問題点

木部（2000）でガとともに「伝達の終助詞」として位置づけられているドは、若年層の日常の生活語から消滅してしまっただようである。これは、鹿児島方言の共通語化に伴い、在来形ドの意味領域とほぼ同じ領域を受け持つ共通語語形のヨに置き換えられたためと考えられる。⁴ 在来形ドがどのような意味領域を占めていたのかは上村（1998）などにも十分な記述がなく、推測するのも容易ではないが、共通語形ヨへの取り換えが起きたのはたぶん間違いないと思われる。しかしながら、若年層話者のヨの用法には共通語文法では見られないものも存在しており、このような現象こそがネオ方言文法の特徴を示すものとみなすことができるだろう。多くの言語モデルは、上述の二つの対話モデルを含めてそのほとんどが共通語文法を記述するために開発されているため、方言文法の記述を行う場合、十分機能するものかどうかは議論されていないことが多いが、本節で考察するヨは、共通語のヨより受け持つ意味領域が広い（と見える）ため、現行の言語モデルを方言記述に適用した場合にその問題点をあぶりだしてくれるのである。

以下では、まずKNコーパスに見られる用法を検討し、そのうち、鹿児島方言のヨの意味を考えた上で、ネオ方言記述の問題にふれることにする。

⁴ 鹿児島方言話者に聞くと、現在ヨが使われるところのかなりの部分をドで置き換えることができるようである。ただし、完全に一致しているわけではない。

4. 1 共通語的ヨとネオ方言的ヨ

本稿の立場ではヨは文末詞として当然「命題的情報を談話領域に提示する」わけだが、その際もちろん前述のガと同じ意味（すなわち、話者がその場で命題の成立を判断したという意味）で情報の提示が行われるわけではない。以下KNコーパスから例を拾い、前接する情報の種類からこの点を検討し、ヨの意味の特定を試みる。

A: 話者に属する情報

A1: 話者に関する事実

(15) (旅先にどんな服を持っていくかを話しながら)

B468 あ あー ワンピースもってってもいいよねー そいえば

A380 だからあのほら

B469 でもいっしょになるよね

A381 わたしが行ってんのは

B470 いっしょに あれーでしょ くろのでしょ？

A382 ん あたしあれしかもってないから

B471 あたしももってないよ

(M18)

A2: 過去の事実・経験

(16) C304 あ かんけないけどねー くうこうのねー

A263 うん

C304 あのれすとらんでたべたいちごのめちゃめちゃおいしかったよ

A264 いちごー？

C305 うんいちごの パフェみたいなやつ

(M18)

A3: 話者が得た／持つ知識

(17) (旅行ガイドを見ながら)

C29 あのねー かごしまおおさかでねー はちじにでるやつにのったらー
けいしょくがーつくよー

A254 みしてみしてみして

(M18)

A4: 話者の意見

(18) (Cの名前が日本人的でないということについて)

C470 このまえへんななまえっていわれた ひじょうにショックだった
ちくしょー

A467 かわいい『よー』 かわったなまえで

B557 ねー

(M18)

B: 聞き手が容易に受容できると話者が見込める情報

B1: 推論を通しての論理的帰結

(19) (アルバイトの話から友人がたくさん服を買うという話題へ移行する)

B255 いやだー○○○ちゃんあれいちねんかんつづけたからすごいよね

A256 すごい (.....)

B256 でもさー○○○ちゃんたぶんはっせんえんじゃさーどうーふぁみりー
のふくあんなにかえないよー

A257 かえなーい ほかになんかしてんのー?

(M1)

B2: 眼前の状態・状況

(20) (Cの前髪がなかなかまとまらないことについて)

B409 カールしてるん(・・) そとはね (・・)

A330 やー うん こうむすんでー であげてでしょ?

C367 うん

A330 もどるわけないよー もどるー もどるー っていうかとめてるじ
てんから やばいってかんじじゃない?B410 うーん なんかねー かえろうとしてるよ よ かがみ (笑)

A331 ゆだんしたらばちーんていきそうな

(M18)

B3: 世間知的事実

(21) (女性が履くサブリーナパンツについて)

A415 サブリーナーは (・)びってなってるがね じゃなくてふつーに

B507 じぶんできっちゃえ

A416 これをー?

C428 あーー いいかんがえだよ

B508 (笑)

A417 うーーーーん

B509 もったいないか

C429 サブリナねー あしみじかくみえるよー

(M18)

C1: 繰り返し

(22) (パチンコ必勝法を書いた作者について)

B391 たまるよねー ねんしょー ねんしょーにおくまーすくなくみつもつていちおくだったとしてもさー

A392 うーん

B392 にねんやったらにおくだよー

A393 (笑)

B393 どーするのー

A394 いえたつよねー

B394 いえたつよー

(M1)

共通語用法のヨは、A: 話者に属する情報、B: 聞き手が容易に受容できると話者が見込む情報、C: 先行文脈で提示された情報の繰り返し、という大きく分けて三種類のタイプの情報に後接すると思われる。Aは(その場で得たものも含めて)話し手の知識内にあり、たぶん聞き手知識には存在しないと予想されるもの、一方Bは聞き手が推論などを介して持つことを(話し手が)見込める情報、または目の前で起きている状況などである。Cの繰り返しは、相手(=聞き手)が先行文脈で述べたことを繰り返すので情報価は低いが、話し手が自らの側の情報として改めて談話領域に提示するということに意義がある情報である。

これらの例すべてに共通している情報の性質は、「命題情報Xは基本的に話し手が自分の知識として持っているもの」と言えることである。このような情報を談話領域に表示する共通語文法のヨの機能を片桐(1997: 244)は次のように述べている。

(23) ヨは当該の情報を話し手が自分のものとして受容していることを示す

上述のように、Aは話し手が持つ知識、Bは話し手がすでに受け入れている、

もしくは発話の時点で受け入れている知識，Cは相手の提示する情報を受け入れ自分の知識としたことがそれぞれの情報内容主なの特徴であり，これらはすべて，(23)で片桐が言う「情報の受容」ということを表していると考えられる。つまり，現行の若年層方言のヨは基本的には(23)で説明できるものと思われる。

このように，片桐の定義は共通語用法のほぼすべてを取り扱うことができる非常に強力な説明力を持つ。しかし，鹿児島方言には以下のような聞き手の確認・承認を要求するヨの用法があり，(23)ではこの用法まで含めて説明することができない。

D: 共有知識への言及，または情報の共有状態を創出⁵

D1: 過去の事実，共有経験への言及

(24) (Aの留学先の語学学校について)

A72 ごがくがっこう、うん、そうそうそうだからそのじゅぎょうない
ようもねー、コミュニケーションとかなの、おんぼうとかじゃな
くて。

B72 ていうかあたしのともだ(ち)ちゅうごくにいるつつた『よ』ー

A73 あーあーあーん いったー

(M10)

D2: 聞き手との共有が見込まれる世間知的事実への言及

(25) (統計学の授業について)

A60 うーん でき ていーけんていとかはさ なんかそのあてはめてさ
でたすうちからさー

B60 そう そのねー

A61 あのーゆういさがどうたらこうたらちゅうのがあるよー あれが
よーわからない

B61 うそー おれなんかもあったのよー

(M17)

(26) (ブティックのセールの案内について)

B320 (き) あきたってゆーかかいたのよねー

A321 せーるのごあんない

B321 あれさーなんけ

⁵ 結果的に聞き手の確認を求めるという語用論的意味を産出する。

A323 うん

B323 かうときにさじぶんのじゅーしょとかかくよー』

A324 かくー

B324 (あれ) あれじゃだめなの『けー』

(M18)

(27) (市内のタクシーについて)

A78 (ううん)とくちょうがあるの ○○(と××)はえらいとばす

B78 あー

A78-2こわいくらいとばす

B79 なんか (うん)それはしってる あと なんけ あでも(わかんな)
(地名)のさ なんかピンクのタクシーとかさー あるよー』 あれ
にっかいのってみたいんだけどー

(M22)

D3: 社会通念的知識

(28) (祖父宅の隣家の夫婦げんかについて)

B302 いや やっぱりおれなんかはわかんなかったけど なんかね よ
るとかにねー じいちゃんばあちゃんがうちにきたりとかあった
もん

A303 うそー すごい

B303 なんかね もうたたかれてたりとかしてたんだって

A304 よめにー? ぎゃくじゃないふつう ねー ふつうさ しゅうとめ
にいじめられるよ つよいねー

(M13)

D4: 予測できる結果

(29) (国立大後期入試の小論文を受験したときについて)

A149 だからさー もー もうじかんものこりすくないわけよぎりぎ
りかいたからー

B149 うーん あわてるよねー

A150 したらさ はーもうわたしだめだー らいねんだーとおもって
まあもともとねー らいねんだなーとおもってたんだけど うけて
からもうそれをじっか んしたわけよ もうだめー もう(こ)れは
おわりだーとおもってさ (笑)

B150おわりだー (笑)

A151 (いいからさ) ほいだってささいごー けつろんがいちにぎょうだ
『よー』そんなんみたことないでしょう

(M20)

D5: 行為の説明

(30) (国立大後期入試の小論文を受験したときについて)

A143 いっしょうけんめいろっぴゃくじだとおもってかくんだけどー
() せんじなのよ わたしのじょうたいは

B143 あふれるのじゃあ

A144 そう だからー つめてつめてつめてつめてかいてもー さんだん
らくでかいたのあたし

B144 うんうんうん。

A145 さいしょ (はー) ふつうにかきだすよ でほんろんがー かくよ
そしたらねー さいご(に)にぎょうしかのこんないわけよ

(M20)

(31) (実験用マウスの世話について)

B74 あー くじにえさやって ごじにえさやっておわりー

A75 うん くじにね えさをやるよ いっぱいさ で はんどりんぐを
するよ で かえってー で ごじにえさをぬく いっぴきのぶん
だけぬきにくる(わけよ)

B75 ぬき?

(M17)

これらの用法は共通語文法では容認しにくいものと思われるが、ヨは(23)で言う「話し手が自分のものとして受容している」ことの標識であることには変わりなく、この対話モデルではこれらの用法がなぜ共通語文法では容認度が落ちるのかを説明することができない。対話モデルが有効なものであるためには、地域(もしくは社会)変種間での用法の違いも含めて、適切に説明できる記述を行わなければならないはずである。次小節では、命題情報Xの性質をさらに検討し、この種の情報が取り扱えるように対話モデルに修正を加える可能性について考える。

4. 2 ヨの方言差の記述

方言の記述には二つの可能性が考えられる。ひとつは、Dの用法を含めた鹿児島ヨを共通語のヨと別のものとして記述する方式、もうひとつは、基本的に共通語文法と同じ記述を使い、それでカバーできない部分に新たに記述を加えるという方式である。まず、この問題に答えるために、どのように共通語化

が進行したかを考えてみたい。

鹿児島方言の共通語化は、方言語彙や文法形式が軒並み共通語形に置き換えられたことで大きく進行した (cf. 太田1998)。その置き換えのひとつとして、現行のヨは在来のがヨに置き換えられたものと推測される。名詞や動詞などの内容語の置き換えを見ればわかるように、文法機能を表示する語形類も意味的に一番近い対応関係を成す語に置き換えられているはずなので、基本的には共通語文法の記述を方言の記述に当てはめてもよい場合が多いと思われる。しかしながら、文末詞などのように情報提示のあり方に関わる言語要素には、おそらく地域方言独特の社会・文化的意味をも包含した意味領域の分担があると思われ、そのために共通語文法とはいく分かのずれが生じたと考えられる。⁶

また、文末詞の中にはガのように在来形が残存しているものもあるが、共通語から新しい語形が入り込んでくるにつれて、単なる語形の置き換えだけでなく、新しい用法も取り入れられ、その結果方言内部での文末詞の体系に変化が生じているのではないかと推測される。もともとは語形の置き換えに始まった共通語化だったのだろうが、文末詞のように文法機能を持つ語形は置き換えが起きる前の在来形の用法（この場合はドの用法）と共通語文法のヨの用法が複雑に絡みあって、現行の用法ができあがったと考えられる。このような事情を考えれば基本的には共通語文法の記述を使用し、それがうまくカバーできない部分の記述を加えるという方法で記述は可能と思われる。

それでは、共通語文法を手がかりにDの用法を対話モデルにどのように組み込むかという問題に移ることにする。まず、命題情報Xの内容を整理することから始める。Dの用法のヨは、結果的に聞き手の確認を求めるという語用論的意味を生み出してはいるが、その基本的機能は共有知識への言及であり、その結果、(活性化された)情報の共有状態を創出するものと見てよいだろう。

⁶ 取り替えが起こって語形は共通語形になっても、用法は在来方言文法のままのものもある。「おつかれさま」、「ですよ」、「たのしいでした」などがそうである (cf. 木部・太田・中島1996)。これらも、もちろんネオ方言的特徴として記述できるものである。

(24) ~ (31) の例を見ると、命題 X となる情報の内容には次のような特徴が見られる。

- (32) a. 発話時点では談話中に明示的に記載されていない情報であること
b. その情報は、話し手、聞き手双方の記憶にあるか、または比較的容易に聞き手が想起ができると話し手が見込める知識であること
c. 話し手側では活性化されているが、聞き手側ではまだ活性化されていない知識（推論の結果が出ていない状況なども含めて）であること

談話においては、共通語文法のヨの場合のように、もちろん話し手側に一方的に属する知識を話し手が導入することもあるが、その場合の情報は基本的には話し手の領域に属するものである。一方、Dの用例の場合は、談話には未記載だが、話し手と聞き手の両方の領域に属する（と話し手が予測する）情報も前接の命題として扱うことができる。共通語文法では、このような情報が談話内に共有情報として取り込まれるときには、聞き手の承認が必要になる。しかし、鹿児島方言では、明示的に承認を求めるという形式が使われるのではなく、(23)の意味、すなわち話し手が情報を受容していることを意味するヨを命題情報に付加して談話領域に書き込むことにより、情報の共有を確認し、共通認識の形成を行っていると考えられる。そして多くの場合、Dの用法のヨは談話内への新しい話題の導入とその確立に寄与する。

ただし、鹿児島のヨが使用されるのは、その命題情報が聞き手の知識内部に活性化されていない形で存在すると見込まれる場合なので、(23)の定義のように、話し手の情報受容という意味だけでは不十分で、コミュニケーション上何らかの不適切さが生じる場合があると思われる。その際には、(24)、(29)のように相手への確認（または、情報共有のしるし）を積極的に求めるマーカーとして昇降調のイントネーション（木部・久見木1995）が用いられることがある。しかしながら、昇降調の使用は、たとえば(25)のように、必ずしも義務的ではない。つまり、ヨそのものに承認を求めるという意味が内在するのではなく、逆にヨ自身には確認を求めるという意味がないために昇降調が用いられるので

はないかと考える方が妥当であろう。(25)や(28)のように聞き手がその情報を知っていることが当然と見込まれる場合（つまり，話し手側の確信が高いとき）には，昇降調はヨと共起せず，聞き手側の積極的な反応（多くは承認）を求め際に用いられていることが多いようである。また，(30)，(31)のように，聞き手側は当然受け入れると予測し，話し手側から一方的に情報を提示する場合なども昇降調は共起しないようである。

その意味ではヨの「確認要求」は，談話内での話題として当該情報を位置づけるために談話構造から生じる語用論的効力の一種と解することができ，ヨそのものはやはり(23)のように話し手の情報受容を伝える標識にすぎないと言える。そして，共通語文法ではこのような情報に後接するヨの用法は容認度が低いが，鹿児島方言文法では容認されるのである。つまり，(23)のヨの定義自体は有効であると考えられるが，これだけでは鹿児島ネオ方言のヨの意味は十分に記述しきれておらず，次の(33)のような意味をどこかに記載しておく必要がある。

(33)ヨは談話に未記載の情報を新たに記載する。その際，命題情報Xは聞き手の受容（確認や承認）が見込めると話し手が思っている内容（話者側の事実，話者の気持ち・判断，一般的事実，推論による当然の帰結，既知の共有情報，客観的事実など）である。

このような知識は，文末詞の語彙的意味というよりむしろ機能に関わる定義であり，これらは別のレベルの定義とみなす方が意味解釈の際にかかる負担を考えても効率的であると思われる。たとえば，河上（1996: 39）では，認知言語学が語の言語的意味と百科事典的（encyclopedic）意味を区別することが述べられている。百科事典的意味とは，「その語にまつわる実に様々な社会的常識や知識」のことであり，その語が使用されることにより喚起される知識全般を指す。ヨの場合で言えば，鹿児島のヨは(23)のような言語的意味をそのプロトタイプの意味として持つが，(32)のような知識を命題的信息として取ることができるということはこの百科事典的知識の中に記載されていると解釈される。

ヨは基本的に「情報の受容」を表示するのみなので、(33)のような共有知識まで取り扱うということを百科事典的知識に記載しておく必要がある。

このように、意味を異なるレベルに分けて方言の記述を行うことは、鹿児島方言のように多くの在来方言要素が共通語化してしまった方言を記述するには有効な方法だと思われる。なぜなら、鹿児島のヨの場合のように、共通語化は在来形を共通語形に置き換えただけでなく、在来形が受け持っていた意味を引き継ぐことに加え、さらに範囲を広げたり狭めたりしながら新しい方言の体系を作り上げていくため、以前にくらべて方言の特徴が見えにくくなっていると考えられるからである。また、方言調査者が一定のフォーマットに従って記述を行えば、単に方言間で意味・機能が異なるということが明らかになるだけでなく、プロトタイプの意味なのか百科事典的知識なのかといった、意味レベルの違いからの方言間の比較も可能になる。現在地域方言が軒並み共通語の影響を受けて変容している状況を考えれば、共通語的記述を中心に据え、それに方言の記述をどのように加えていくのがその後のさまざまな応用研究に利益をもたらすかを考えたとき、認知言語学的記述法は非常に有効な手段の一つであると言える。

5. おわりに

以上、次の4点を中心に述べてきた。

- (34) a. 対話ベースの言語モデルでは、文末詞は対話参加者の「知識情報の提示」と「情報共有のための対話調整」の機能を持つとみなすことができる。
- b. このモデルでは、鹿児島方言の文末詞ガは「命題情報Xが成立すると発話時に話者が判断を下した」ことを伝える標識と言える。すなわち、これが「自明のことを伝達する」ことの意味である。
- c. 鹿児島方言のヨも共通語のヨと同じく、その語彙的意味として「話し手が当該の情報を自分のものとして受容していること」を表すと考えられ、対話モデルの観点からはこの記述がそのまま適用できる。しかし、鹿児島のヨは共通語にはない「共有知識への言及」の用法があり、これは共通語文法の記述だけではカバーできない。

d. 共通語的用法と「共有知識への言及」の違いは、前接命題Xの種類である。前接命題の位置にどのような情報を取りうるかは、ヨの語彙の意味とは別のレベルの意味（たとえば、認知言語学的には百科事典的知識と呼ばれる知識）に記載されている情報と考えられるのではないか。

鹿児島方言のヨと同様に、共通語化が進んだ各地の若年層方言には共通語的語形でありながら共通語とは意味・機能にずれが見られるものが存在するのではないかと推測される。本稿ではそのような場合の意味記述の可能性について示唆した。意味記述のモデルとしては、現在のところ認知言語学的記述が最も有効性が高いように思われれば、認知言語学の中にもいろいろな分析的視点があり、どのような方向性をもって記述をするべきかは問題である。また、百科事典的知識とはいったいどのようなものか、という問題もある。高橋（2000）は、英語の指示詞 *it* と *that* の違いを記憶の種類との関わりで記述しようと試みているが、終助詞（本稿では文末詞）にも田窪・金水（1996）のように記憶との関わりから説明する見方もある。本稿では「情報の活性化」という言い方をしたが、これを記憶という視点からとらえると、長期記憶に格納されている知識・情報を談話領域の即時記憶への持ち出しと見ることができる。このような点を含め、さらに精密な記述を行うためには、認知心理学的視点も含めた形での記述も考えて行かねばならないだろう。

謝 辞

* 本研究は、文部省科学研究費補助金基盤研究(B)（「現代日本語の音声・語彙・意味・文法・談話における変異と日本語教育」研究代表者：日比谷潤子）のサポートを受けて行いました。研究会で原案に貴重なコメントを頂いた、日比谷潤子、渋谷勝巳、松田謙次郎、ダニエル・ロング、助川泰彦、田中真一、小林めぐみの各氏に御礼申し上げます。用例の検討には、鹿児島大学の上村浩明先生にご協力いただきました。また、認知言語学に関しては、西南学院大学の川瀬義清先生にご教示いただきました。もちろんすべての誤解、誤りが筆者に帰するものであることは言うまでもありません。

参考文献

- 太田一郎 (1998) 「「西日本ネオ方言調査」に見る鹿児島方言話者の言語使用と言語意識」『吸収におけるネオ方言の実態』(研究代表者：真田信治) 平成7年度-9年度 文部省科学研究費補助金(基盤研究(A)(1)) 研究成果報告書
- (2000) 「鹿児島方言の文末詞「ケ」のプロトタイプの意味」『VERBA (鹿児島大学言語文化論集)』18. pp.43-60.
- 片桐恭弘 (1997) 「文末詞とイントネーション」『文法と音声』音声文法研究会編 pp.235-56. くろしお出版
- 上村孝二 (1998) 『九州方言・南島方言の研究』秋山書店
- 河上誓作 (編著) (1996) 『認知言語学の基礎』研究社出版
- 木部暢子 (2000) 『西南部九州ニ型アクセントの研究』勉誠出版
- 木部暢子・久見木大介 (1993) 「鹿児島市方言の質問のイントネーションについて」『人文学科論集』pp.19-34. 鹿児島大学法文学部
- 木部暢子・太田一郎・中島祥子 (1996) 『鹿児島市とその周辺地域における地域共通語の実態とその教育に関する研究』(研究代表者：木部暢子) 平成6年度-8年度 文部省科学研究費補助金(基盤研究(B)(2)) 研究成果報告書
- 金水敏 (1992) 「談話管理論から見た「だろう」」『紀要』19 pp.41-59. 神戸大学文学部
- 金水敏・田窪行則 (1997) 「談話管理理論に基づく「よ」「ね」「よね」の研究」『音声による人間と機械の対話』pp.257-271. オーム社
- 渋谷勝巳 (1999) 「文末詞「ケ」 - 三つの体系における対照研究 -」近代語研究会編『近代語研究』第十集 pp.207-30.
- (2000a) 「方言地理学と文法」『阪大日本語研究』12号
- (2000b) 「山形市方言における文末詞ズ」『阪大社会言語学研究ノート』第2号 p.8-17.
- 白川博之 (1992) 「「働きかけ」「問いかけ」の文と文末詞「よ」」『日本語教育学科紀要』3号 pp.7-14. 広島大学教育学部
- 高橋英光 (2000) 「語用論／機能主義と認知言語学の接点 談話の指示語の理解 - 英語の It と That をめぐって」 認知言語学会設立記念大会 (2000年9月10日 於慶応義塾大学) シンポジウム発表資料
- 田窪行則・金水敏 (1996) 「複数の心的領域における談話管理」『認知科学』Vol.3 No.3 pp.59-74 日本認知科学会
- 蓮沼昭子 (1992) 「文末詞の複合形「よね」の用法と機能」『発話マーカーについて - 筑波大学つくば言語文化フォーラム』第2号 pp.63-77筑波大学つくば言語文化フォーラム編